

第1章 2020年度京都大学構内遺跡調査の概要

伊藤淳史 千葉 豊

1 調査の概要

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門では、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営など掘削をともなう工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果に照らして、発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2020年度には以下のように発掘調査1件、立合調査13件をおこなった。またこのほか、部門教員全員が参画する共同研究に科学研究費補助金の交付を受け、古道白川道ならびに幕末期尾張藩邸の位置確定を目的とする学術調査として、試掘調査を2件実施している（括弧内は、図版1および表3の地点番号）。

発掘調査	瀬戸臨海実験所ライフライン・改修等事業（和歌山県瀬戸遺跡）	（第2章，表3-487）
試掘調査	科学研究費補助金による学術調査（本部構内A X26区）	（第1章，図版1-488）
	科学研究費補助金による学術調査（本部構内A X30区）	（第1章，図版1-489）
立合調査	本部構内基幹環境整備共同溝工事（本部構内A X29区）	（第1章，図版1-490）
	本部構内基幹環境整備給水工事（本部構内A W23区）	（第1章，図版1-491）
	病院東構内積貞棟熱源設備改修工事（病院東構内A F16区）	（第1章，図版1-492）
	本部構内総合研究2号館西側污水配管更新工事（本部構内A Y23区）	（第1章，図版1-493）
	北部構内農業研究施設電気設備改修工事（北部構内B G35区）	（第1章，図版1-494）
	吉田南構内給水工事（吉田南構内A S23区）	（第1章，図版1-495）
	医学部構内給水・ガス工事（医学部構内A P18区）	（第1章，図版1-496）
	本部構内污水配管改修工事（本部構内A Y27区）	（第1章，図版1-497）
	本部構内高圧受変電設備整備工事（本部構内A Z24区）	（第1章，図版1-498）
	本部構内LTE基地局建物設備工事（本部構内A S27区）	（第1章，図版1-499）
	西部構内給水工事（西部構内A Z20区）	（第1章，図版1-500）
	本部構内総合研究1号館別館排水改修工事（本部構内A Z22区）	（第1章，図版1-501）
	病院東構内中央診療棟等改修機械設備工事（病院東構内A K17区）	（第1章，図版1-502）
	北部構内理学研究科5号館地階浸水対策工事（北部構内B G30区）	（第1章，図版1-503）
	本部構内污水配管更新工事（本部構内A X27区）	（第1章，図版1-504）

2 調査の成果

以上のうち、2020年度に整理を終えたものについて成果を略述する。なお、和歌山県瀬戸遺跡の調査成果は、第2章で詳述している。

和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査 和歌山県西牟婁郡白浜町に所在するフィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所は、紀伊水道に突き出た陸繋砂州に立地している。構内は、1965年に石棒が発見されて遺跡の存在が明らかとなり、その後5次にわたる発掘調査などで、縄文晩期の屈葬人骨や弥生前期の配石墓、古墳時代前期や奈良時代の製塩関連の遺構と遺物をはじめとする重要な成果が知られてきた。今回は、小規模ながら1982年度以来となる本格的な発掘調査を実施した。構内西半のA～Cの3調査区において、明確な遺構の確認はなかったものの、縄文時代～古代の遺物を包含する層が確認され、遺跡の広がりや盛衰についての情報を充実させることができた。特に、中央付近に位置するB区において、既往の調査では少量の確認にとどまっていた縄文後期後葉の土器が量的に主体を占めていたことは、新たな知見として注目できる。また、海成層とされる下部砂層が含有する貝片について放射性炭素年代測定を試み、おおむね縄文後期中葉～後葉に相当する較正年代を得たことは、砂堆の形成過程と遺跡との関係を考える上で興味深い情報と言えよう。

科学研究費補助金による試掘調査 部門所属教員全員の協議のもと、科学研究費補助金基盤研究(C)19K01094「都市近郊地域歴史像の再構築－京都・白川道の研究を基盤として－」(2019～2021年度)により、全員が研究代表者や分担者として、近世以前に本部構内を斜行していた古道白川道の研究を進めてきた。昨年度は天理大学の協力を得て本部構内4箇所地中レーダー探査をおこない、本年度はうち2箇所地中レーダー探査を実施し(図版1-488・489)、幕末期に道を途絶させた尾張藩邸の範囲確定と、構内東域で中世白川道の位置と構造把握を目指した。結果、488地点では藩邸の東堀とみられる落ち込みを検出し、2021年度に範囲を拡張し全容把握を目指すこととなった。489地点では、中世期の路面全面が把握され、近世期より南に20m以上離れてはしる状況が詳細に確認された。これらは、2022年3月刊行の研究成果報告書で報告される予定である。

立合調査の成果 上述した489地点の西方約50mで、南北方向の共同溝工事が実施され(図版1-490)、中世の路面や近世の溝が確認された。次節で詳述する。また近代の遺構であるが、旧制三高創設期に設置された可能性のある煉瓦積水路が確認されている(同491)。2005年度の329a地点に続いて2例目の確認となる。(伊藤)

3 本部構内、共同溝設置にともなう立合調査

ガスや電気を埋設する共同溝の設置と、それにとまう水道管の移設工事などの基幹・環境整備工事が本部構内で計画された。工事地点は本部構内の広い範囲におよび（図版1-490）、工事期間も2020年1月から5月まで渡ったため、工事の進捗状況に合わせて随時、立合調査を実施した。その結果、本部構内東辺の総合研究6号館と同7号館のあいだの南北道路における掘削工事で、中世と近世の道路状遺構および近世道路にとまうとみられる水路を検出した（図1）。ここにその概要を報告することにする。

遺構検出状況の概略図と層位の模式図を（図2）に掲げた。地表下1.5~1.6m、中世の遺物を包含する茶褐色土の下層で、灰白色の固くしまった面が露出した（図3写真）。固結した面の範囲は南北方向で6~6.5mほどの幅をもち、北東-南西方向へ伸びていることを確認できた。今回の調査地点の東に隣接する168地点で見つかった中世の白川道SF1〔清水1989〕の西延長上にあたるため、同一遺構とみて間違いないだろう。

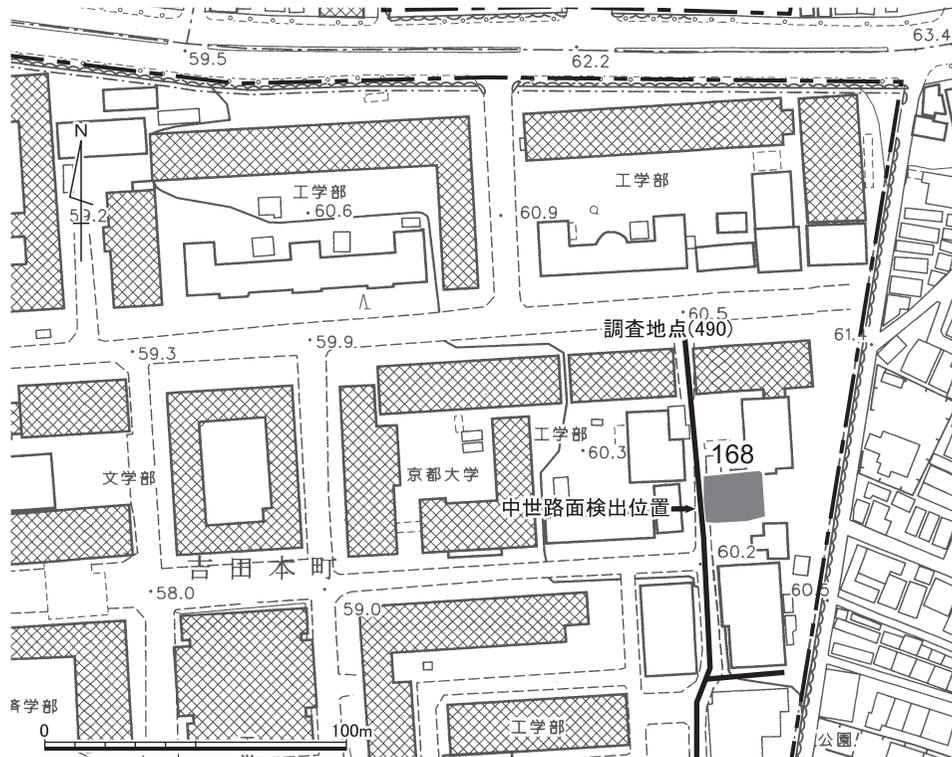


図1 調査地点の位置 縮尺1/2500

2020年度京都大学構内遺跡調査の概要

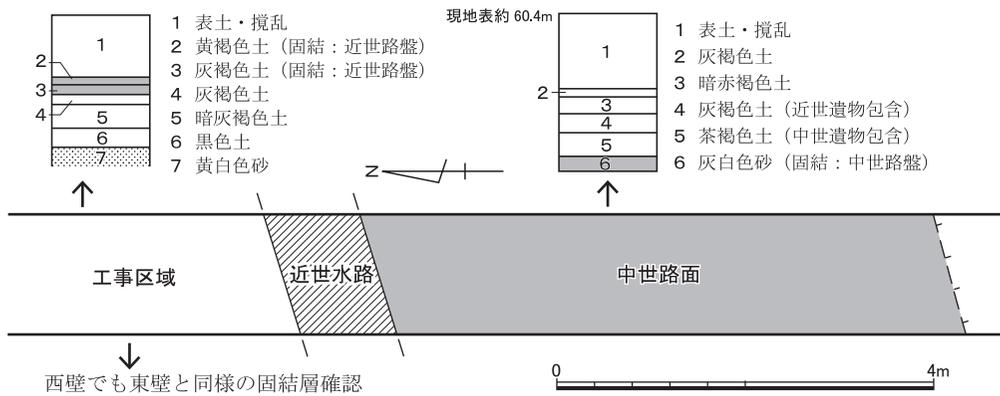


図2 遺構検出状況概略図と層位模式図 縮尺1/80



図3 中世路面の検出状況 (北から)



図4 近世溝の検出状況 (西から)

この道路状遺構の北端は、やはり北東-南西方向に伸びる近世の溝状遺構で切られている(図4写真)。埋土は灰白色の砂礫で、近世後半の遺物を多量に含んでいた。この溝状遺構は168地点で検出された溝SD8につながるとみられる。溝状遺構から北へ1.5mの地点の東壁で、地表下66cmで黄褐色と灰褐色を呈する連続する2枚の固結面を確認できた。攪乱のため、面的な広がりには認識できなかったが、同様な固結面は西壁でも確認できた。検出層位から判断して、この固結面は近世白川道の路面に関連するものと考えられる。この推定が正しいとすると、溝状遺構は近世白川道に沿ってはしっていた水路とみることができる。

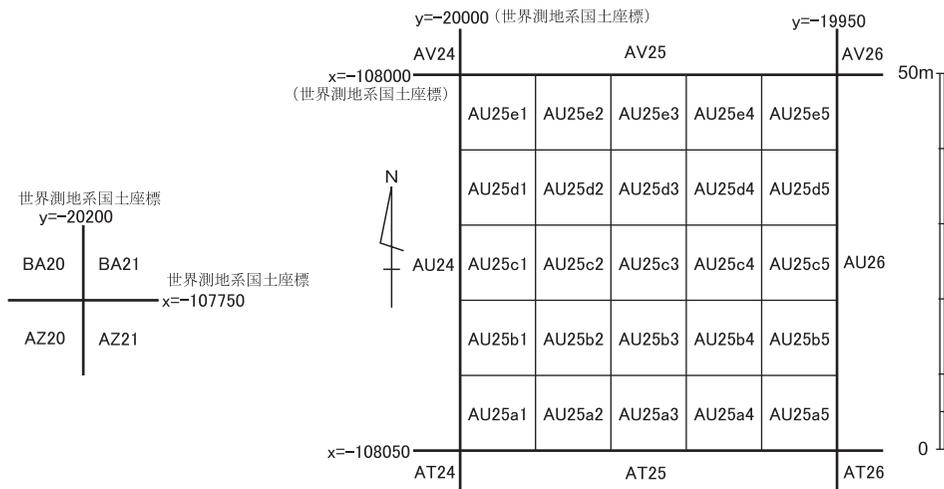
今回の立合調査では、中世の白川道、近世の白川道およびそれともなう水路をみつけることができた。両道路の変遷過程やルートの正確な復原のための重要な情報を得ることができたと言ってよいであろう。(千葉)

4 世界測地系座標表示への移行について

従来の状況 京都大学吉田キャンパスでは、これまで、日本測地系の平面直角座標系第Ⅵ座標系国土座標に従って一辺50mの方形の地区割を設定し、アルファベット2文字と2桁数字の組み合わせで表示してきた。具体的には、東西方向列は南北方向にA A…A Z - B A…B M, 南北方向列は西から東に増加する数字であり、おおむね今出川通り以南が先頭文字Aの、東大路通り以西が20以下の数字となるように割り当てられている。そして、日本測地系の($x = -108000$, $y = -20000$)が($X = 2000$, $Y = 2000$)となるように構内座標を設定し、この変換されたX・Yの構内座標値ですべて表示してきた〔以上の経緯と詳細は、昭和51・52・54年度の年報の第1章を参照されたい〕。

世界測地系表示への移行と構内座標の使用停止 2002年4月の改正測量法施行により、公共測量等が世界測地系に移行した後も、構内遺跡の調査と報告については、日本測地系に基づく上記の方式を継続してきた。しかし、現在は、他機関の調査がすべて世界測地系へと移行し、また、熊野地区や岡崎地区、あるいは本年度の和歌山県瀬戸遺跡など、吉田キャンパスにとどまらない調査機会も増加している。こうした状況に鑑み、他機関の調査と整合性を図り混乱を回避していく必要からも、本年度以降は、構内遺跡についても世界測地系表示のみに移行し、構内座標の使用を停止することとした。

地区割の改訂 (図版1・図5) この場合問題となるのは、これまで調査名称として



も用いてきた50m方眼の地区割である。これについては、従来との異同が極力少なくなるように方眼設定をすることとし、今出川通り付近をはしる世界測地系での $x = -107750$ ラインをA ZとB Aの、東大路通り付近の $y = -20200$ ラインを20と21の境界として、あらたな地区割とした（図5左側）。発掘調査や遺構・遺物の整理記録に用いている10m四方に分割する小地区の表示は、従来通りの方式とし、大地区名の後ろに南から北へアルファベット小文字 a～e、西から東へ数字 1～5 を付して示す。例えばA U25a1区は、大区画A U25区の西南隅の10m四方小地区を表すことになる（同右側）。ちなみに、例示しているA U25区の北西隅（ $x = -108000$, $y = -20200$ ）は、世界測地系での1/2500都市計画図「吉田」図幅の北西隅に相当しており、構内では本部構内時計台の中央付近に位置する。

なお、世界測地系への変更にもなう上記の改訂で設定された地区は、従来の地区と厳密には一致しておらず、おおむね東に10m北に3m程度移動している。しかし、昨年度までの報告で記載していた地区名は、混乱を防ぐためそのままとしている。新たな地区割に照らすと明らかに異なる地区表示とすべきものは、その旨を調査一覧表（表3）の備考に附記することで対応した。

このほか、第I部巻末に付している報告書抄録についても、本年度からは世界測地系に準拠した位置表記に変更している。（伊藤）